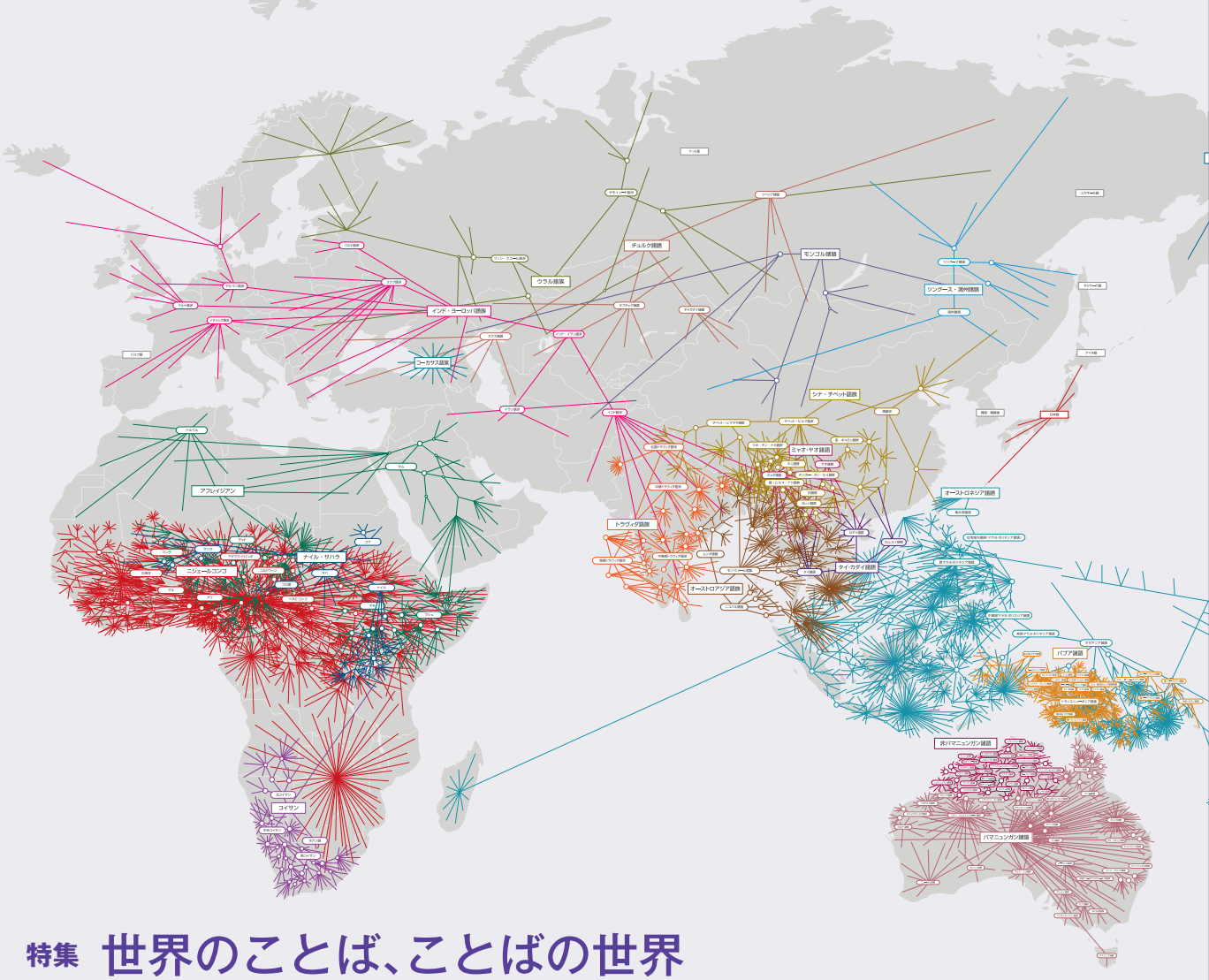
国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成22年7月1日発行　第34巻第7号通巻第394号

月刊みんぱく

2010 7月号



特集　世界のことば、ことばの世界

世界のことばの数はどこから　庄司 博史
「ことばスタンプ」ができた！　菊澤 律子
はじめての手話の展示　亀井 伸孝
系統と語順　長野 泰彦
ことばが世界をつなぐ～世界の絵本～　菊澤 律子
世界の文字　八杉 佳穂
方言のたのしみ方　井上 史雄

エッセイ 千字文

シーサンパンナというところ

鎌澤 久也（かまざわ きゅうや）

プロフィール
1952年岩手県生まれ。写真家、駒澤大学非常勤講師。アジア各地の人びとの暮らしを追い続け、「雲南」など多くの写真展を開催。近著に『シルクロード全4道の旅』『シーサンパンナと貴州の旅』『メコン街道』など。

中国の雲南省をはじめて訪れたのは一九八六年のことだった。タイで少数民族と知り合い、彼らの生活にひかれて通いつめているうちに、雲南省から南下した民族だと知り、彼らの故郷を見たくて訪れたのがきっかけだ。

雲南省の最南端、ラオスとの国境にシーサンパンナというタイ族の住む街がある。今では日本からでも一日でいけるが、当時は省都昆明からバスに揺られて二泊三日が定番だった。そうして訪れたかの地は亜熱帯性気候で、女性たちは目も眩（くら）むような原色のサロン（腰巻状のスカート）を身にまとい、長い黒髪を束ね、ヤシの木が並木道をつくるなか、色鮮やかなハイビスカス、ブーゲンビリアと絡まり、もつれ、戯れている。どこか東南アジアの一地方都市といっても通じてしまいそうだ。

以来シーサンパンナが気にいり、その後何度となく訪れるようになったのだが、ある日、夕涼みもかね、メコンの岸辺にいくと、女性たちが川で洗濯や、髪を洗っていた。濡れたサロンが体にはりつき、あらわになった曲線美がたまらなく色っぽい。近くでは子どもが一〇人ほどいて、泳いでは土手にへばりつき、みんな体を真っ黒にしながら遊んでいた。まるで自分の原風景を見ているようだ。

街の郊外では毎週日曜になると、青空マーケットが方々で開催される。会場となった通りは人、人、人でごった返し、タイ族やアイニ（ハニ）族、ラフ族、プーラン族が、肉や野菜、山で採った山菜などを売っている。商売のかたわら刺繍（しゅう）に精をだす女性もいる。どの民族も一目でわかる独特の衣装を着ている。自分たちのアイデンティティを誇示しているのだ。

日本に馴染み深い食べ物も多い。豆腐、コンニャクはもちろん、赤飯、チマキ、納豆まで売られているではないか。一時、「照葉樹林文化論」というのがもてはやされたことがある。カシ、ツバキなどの照葉樹が自生する、ヒマラヤ南部から西日本にかけて、共通の文化がみられるというのだ。それが高じて雲南が日本文化の発祥と考えられたこともある。事実はどうであれ、この地域をまわっていると、そう考えても不思議ではないと思った。

しかし、近代化とともにこうした定期市も簡素化され、民族衣装も徐々に脱ぎ捨てられるようになった。糸を紡いで織る衣装よりも、お金さえ払えば簡単に手に入るプリントされた布が魅力的なのだ。ゆくゆくは民族衣装も祭り、結婚式といったハレの日にしか、お目にかかれなくなりそうだ。

月刊 みんぱく 7月号目次

1 エッセイ　千字文
シーサンパンナというところ　鎌澤 久也

特集　世界のことば、ことばの世界
3 世界のことばの数はどこから　庄司 博史
4 「ことばスタンプ」ができた!　菊澤 律子
5 はじめての手話の展示　亀井 伸孝
6 系統と語順　長野 泰彦
7 ことばが世界をつなぐ～世界の絵本～　菊澤 律子
8 世界の文字　八杉 佳穂
9 方言のたのしみ方　井上 史雄

10 研究フォーラム
モノと人の関係を問い直す
竹沢 尚一郎
12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
陳氏一族の栄華と革命の歴史を刻む
広東民間工芸博物館（陳家祠・陳氏書院）
川口 幸大
15 みんぱく 私の逸品
ハワイの女性神像（アウマクア）
須藤 健一
16 散策と思索の径
ドイツ・バイエルン州の森を歩く
佐々木 史郎
18 多文化をささえる人びと
ある無料雑誌から垣間みる
在日ブラジル人の動向
アンジェロ・イシ
20 歳時世相篇
ビールの美味しいころ
神話としての「やってみなはれ」
出口 正之
22 フィールドで考える
エリートは語ることができないか
太田 心平
24 次号予告・編集後記

特集

世界のことば、ことばの世界

本年三月、民博の言語展示がリニューアルされた。一九七七年の開館後、約二〇年後に一度大きな改装があり、今回は二度目ということになる。開館時、前回の改装時、いずれの展示も、言語への理解を深める装置を当時最新の技術で開発した点で注目をあびた。今回の言語展示もそれらにまけず大胆なアイデア満載で、言語にかかわってきたスタッフが協力者とともに総力を結集して実現した。展示は三つの部門からなっている。ことばを構成する音声、単語、文の構造を、装置との対話により体験学習するコーナー。世界のことばの多様性を、絵本の読み聞かせ装置、方言装置、世界の言語装置やパネルで紹介するコーナー。そして世界の文字の多様性、それらの系譜や分布を説明するコーナーである。いずれも将来への発展の種をたくさん仕込んだ進化する展示である

世界のことばの数はどこから

庄司（しょうじ） 博史（ひろし）
民博 民族社会研究部

「世界には六〇〇〇とも七〇〇〇ともいわれることばがはなされる」と近年はいうことにしているが、つい数年前までは「五〇〇〇とも六〇〇〇とも」で通してきた。この短いあいだにことばが一〇〇〇も増えたわけではなく、かといって、わたしが数えなおしたのでも、確証的根拠をみつけたのでもない。単に多いことをいいたいだけで、正直いって五〇〇〇でも七〇〇〇でもいいと思っている。

基準と話者の意識

じつをいうと、ことばの数というのは判断の基準が定まっておらず、どのような基準で数えるかで多くも少なくもいえる。

たとえば、国家の公用語や国家語として公的な地位を与えられ、日常生活はもちろん、政治から文学、科学、教育などさまざまな分野に用いられることばというと、おそらく一〇〇にも満たないと思われる。それに対し、公的地位どころか、文字ももたず、小さい集団で話されることばなら、一挙に数千のランクに到達する。

ここで問題となるのが、そんな小集団のことばがすべて独立した言語といえるかである。ひとつの基準として、話者どうしで通じ合うかどうかで判断する方法がある。これなら一〇〇年ほど前の日本では、おそらくお互いに通じ合わないいくつかの言語があったことになる。その一方で、れっきとした書きことばをもち国家語でもあるチェコ語とスロバキア語、ノルウェー語とスウェーデン語話者は難なく通じ合うため、方言どうしということになってしまう。

そこで登場するのが、話者の意識、すなわち自分たちのことばを周囲のことばとは別のことばと自覚しているかどうかという基準である。しかしこの基準も絶対的ではない。同じ集団のことばでも、話者によって意識が同じではない。沖縄のことばを日本語の方言と思う人もあれば、独立した沖縄語と主張する人もいる。関西弁でさえそうだ。その一方で自分たちのことばが何語か考えたこともない人は世界には多くいる。

民博の『エスノローグ』

それでは七〇〇〇という数はどこからくるのか。おそらく、国家語や言語集団の数、さらに言語意識の基準を最大限活用した際の数字であろう。よく知られた文献として、言語名を可能なかぎり登録した『エスノローグ』という本がある。これによれば日本には日本語のほかに、南西諸島の宮古、八重山、与那国など一〇あまりの方言が言語として登録されており、言語マニアのきまぐれが採用されたとしか思えない。

ところで今回の言語展示では、このような世界のことばについて、映像や音声、文字資料とともに、話者数、使用地域、言語の地位など幅広い情報を提供する装置が登場した。現在約一八〇言語で、七〇〇〇には程遠いが、モニターを通して普段、聞くことのできないことばや話者に触れることができる。うれしいことに今回は音声言語にならび、一〇近くの世界の手話を動画や文字解説で紹介できた。今後は、各国ごとに公用語、民族語、手話とともに、移民言語も採用し、民博の『エスノローグ』として充実させていきたい。

「ことばスタンプ」ができた！

民博 民族文化研究部
菊澤（きくさわ） 律子（りつこ）

「ことばスタンプ」って？

丸いテーブルとカラフルなスタンプが入ったワゴン。見た目には、とくに変わったことはない。説明もなにもないので、とりあえずはスタンプをひとつ、テーブルの上に押してみる。すると、

「あ〜」

いきなり声が!? さらに別のスタンプを押すと、こちらは「s〜」と声にならない（?）声。テーブルの上には〝s〟の文字が映る。思いついてふたつのスタンプを組み合わせて押すと、「さ」という声とともに〝さ〟の文字があらわれた。

そう、ことばスタンプは、いろいろな音を組み合わせてことばをつくることができる装置。わたしたちが話していることばをどんどん分解していくとえられる最小の単位は「音」（音素）。人が口から発した音の連続は、話者が頭のなかにもっている「この響きは◆だ」というリストに照らして解釈される。◆は、日本語であれば「あ」であったり「ん」であったりするが、これは、話者が頭のなかにもっている音の概念である。音が集まって語ができ、語が集まって文ができる。語や文にはさらに意味の解釈がかかわってくる。音を手にとって遊びながら、ことばを構成する「音」・「語」・「意味」の三つの要素のつながりに気づいてもらえる仕掛けをつくりたい！という民博の言語学者の想いと、科学展示制作のノウハウをもつ（株）GKテックの意気込みが組み合わさって、世界初のことばの展示装置ができあがった。

繰り返し語で遊ぼう！

音の出るスタンプをぺたぺた押すだけでも十分楽しいが、ことばスタンプはそれだけにとどまらない。日本語にある音をふたつ続けて押すと、繰り返し語ができる。たとえば、「す」と「や」なら「すやすや」。繰り返し語のなかで機械に登録されている語をうまく当てると、五味（ごみ）太郎（たろう）さんによるおちゃめなイラストに加えて例文、英訳なども見ることができる。最後に繰り返し語をあらわすひらがなの文字が独特の動きで繰り返し語の意味を表現。これが見たくて、繰り返し語を繰り返し次から次へとつくってしまう人も。

発展問題

さて、ここまでおわかりのように、「ことばスタンプ」は耳で聞く言語を手にとって遊んでいただく装置。それでは、目で見る言語である手話を構成する最小単位は何だろう？その構成要素を遊びにしたらどんな機械になるだろう？「ことばスタンプ」で遊び尽くしたら、次にはそんなことも考えてみてほしい。良い案が浮かんだら、ぜひ、民博の言語チームにご連絡を。

スタンプの裏はこんな感じ。「みんぱく」とつくってみました

ことばスタンプ。とってもカラフル

繰り返し語をつくると……

はじめての手話の展示

大阪国際大学准教授
亀井（かめい） 伸孝（のぶたか）

世界の手話の数かず

耳の聞こえない人たち（ろう者）が手話を話していることは、よく知られているだろう。手話は声を使わず手で話すため、これまで非言語コミュニケーションの代表例だと考えられてきた。

しかし、一九六〇年にその常識をくつがえす発見があった。手話には音声言語とは異なるれっきとした文法がある、つまり、音を使わない視覚的な言語であることが明らかになった。以後、半世紀にわたる手話言語学の取り組みのなかで、世界には少なくとも一三〇種類のさまざまな手話が分布していることがわかってきた。

手話映像で出迎える言語のコーナー

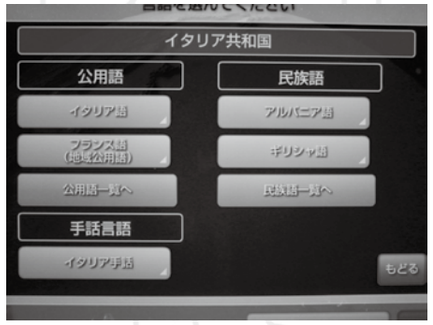
今回、民博の言語展示のなかで、手話が大きく取り上げられた。言語コーナーの入口で来館者を迎える映像では、世界に手話が一〇〇種類以上あると紹介されている。また、ろう者と聴者（耳が聞こえる人）のふたりが登場して、日本手話と日本語のふたつのことばで、手話の文法の特徴を説明する映像もある。

そして、「世界のことば」の装置では、音声言語一六六種類とともに、日本、香港、ベトナム、マレーシア、スリランカ、インド、アメリカ、イタリアで話されている八種類の手話の動画が収録された。たとえば「イタリア共和国」というページを見ると、「イタリア語」の下に「イタリア手話」が並んでいる。そして、ろう者が語るイタリア手話の映像を見ることができるのだ。日本や外国のろう者たちが、モデルや映像提供者、解説文作成者として展示制作にかかわったことも、画期的なことである。

ふつうの言語のひとつとして

わたしが展示場を訪れたとき、「へえ、手話って国によってぜんぜん違うのね……」と、驚きとともに展示を見つめる来館者たちがいた。今回の新しい展示が、手話への誤解を正すことになった瞬間である。博物館の力を思い知った。

手話言語学誕生五〇周年の節目である今年に、この画期的な展示ができたことを喜びたいと思う。社会のなかにあるふつうの言語のひとつとして、手話が広く認知される日も近いのかもしれない。



各国の音声言語画面では、音声言語と手話が並ぶ

手話と音声で、手話の文法について説明する

背景イラスト：『手話の世界を訪ねよう』（亀井伸孝著、岩波ジュニア新書）より転載

系統と語順

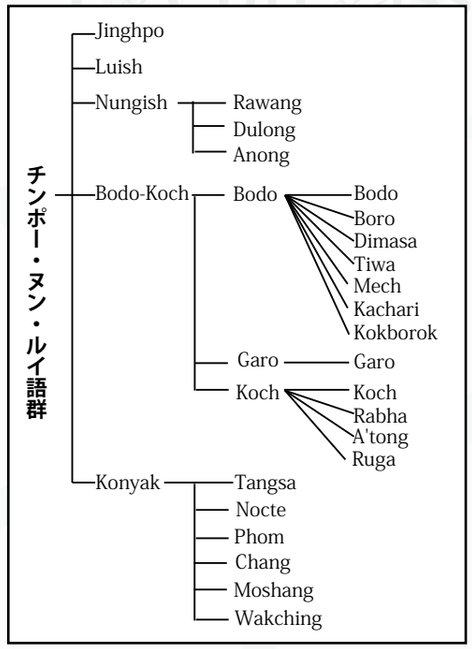
長野 泰彦（ながの やすひこ）
民博 民族文化研究部

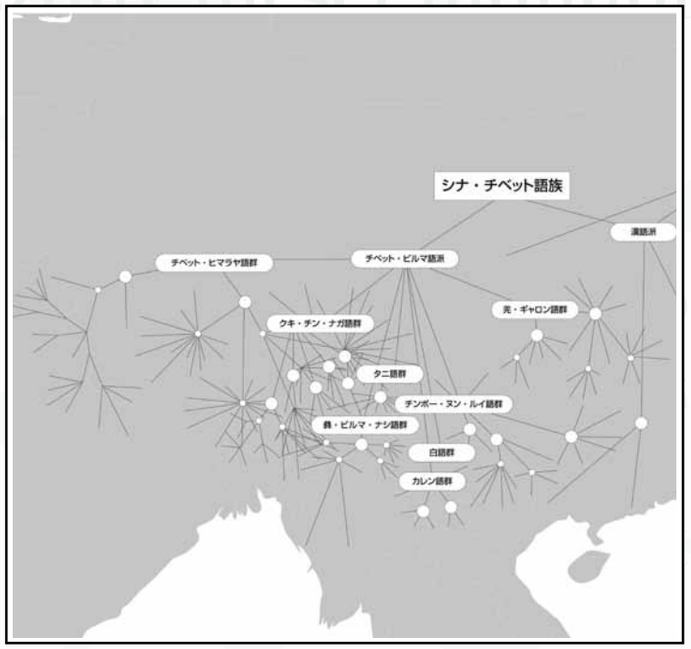
系統図

現行の国立民族学博物館の地域展示の多くには、各地域の地勢図や生態分布図などとならび、言語の分布図が掲げられている。現代のそれぞれの地域での言語の有り様を示すものとして、とりあえず満足すべきかと思われるが、今回の言語展示では、さらにそれに系統、つまり、歴史的関係を反映させた地図はできないものかと知恵を絞った。その結果できあがったのが、窓側の点字関連資料の上にある地図である。

当初、世界にはこんなにいっぱいことばがあるんだ、ということをまず示したいとの発想だったので、なるべく広いスペースを使って、個別言語名まで書き込もうと考えた。ところが、これは大誤算だった。地球上で海が巨大であることを忘れていた。オーストロネシア諸語のように、島に分布する言語は別として、多くの言語は大陸部に存在するからである。窓の上の二面を使っても書ききれないことが明らかになった。

しかし、それでも系統を表現したいことに変わりはなかったので、個別言語名は諦（あきら）めても、語族・語派・語群とその歴史的分岐は明示しようということになった。シナ・チベット語族を例にとると、まず歴史的に古い段階で、漢語派とチベット・ビルマ語派にわかれる。チベット・ビルマ語派はさらに八つの語群に分岐するが、この系統関係は不明なので、チベット・ビルマ語派から直接枝わかれさせてある。そのひとつ、チンポー・ヌン・ルイ語群を詳しく見よう。この語群は左の表のような下位分類になる。地図の「チンポー・ヌン・ルイ語群」のすぐ上に腕だけが単独で二本出ているのが、チンポー語とルイ語、下にある大きな丸が左からヌン、ボド・コチ、コニャックである。ボド・コチの下に小さい丸がふたつあるが、それぞれボドとコチ、というふうに下位分類を示してある。個別言語は記述せず、線香花火のような線が言語の数をあらわす。





シナ・チベット語族 言語系統図（部分）

こういった作業を各語族ごとにおこない、地図上に落とすとできあがりなのだが、かなり混み合ったものになってしまった。でも、これが現実であり、言語の多様性と絡み合いは表現できたと自負している。ただし、この地図はあくまでも模式的な概念図であり、実際の分布と一致していない部分もあるし、歴史的な移動の経路を忠実に写したものではないことをお断りしておく。

語順

世界中のことばがどういう統辞法（語彙（ごい）の並べ方）を取るかを類型的に示すのが語順装置である。「おばあさんが子どもに昔話を語った」という文を一四七言語について調べた。装置では、言語名からも語順の類型からも検索できる。語順の類型から入ってみると、文の先頭に「おばあさん」がくることばが圧倒的に多いが、逆に文末に立つ言語はふたつしかないとか、「語った」が文頭に立つ言語は一一あることがわかる。同じ類型に属する言語の数が画面右上に出てくるので、どの程度変わった語順かもわかるしくみになっている。

日本語は特殊だと思い込んでいる日本人が多いが、日本語と同じ語順を取る言語は四六、英語と同じ語順は六三ある。英語は方言と仲間のことばが収録しやすいため多いだけで、実際はほとんど同じと考えてよい。むしろ日本語タイプの方が多いのである。もちろん語順だけで言語の類型が決定されるわけではないが、日本語タイプの普遍性に目を向けるきっかけにはなるだろう。

ただ、「おばあさんが・・・・・」の例文が四つの構成要素に収まらない言語もある。例えば、中国語粵（えつ）方言（広東語）では

阿婆	講咗	故仔	畀小朋友	聽
おばあさん	語った	昔話	子どもに	聽く

という構文になる。直訳すると「おばあさんが昔話を子どもに語り、子どもは（それを）聴いた」となる。

最初の文の目的語が「聽」の主語になる、いわゆる「兼語文」の一種で、「聽」がないと広東語の話者にとっては落ち着きが悪い。語順装置では「聽」を無視して類型化したが、こういった言語は他にもあり、どう位置づけるかが今後の課題として残っている。

ことばが世界をつなぐ～世界の絵本～

菊澤 律子（きくさわ りつこ）
民博 民族文化研究部

夜寝る前にお母さんに読んでもらっていた本。どこか遠い国にも、毎晩同じお話を聞いて眠りにつく子がいたかもしれません。いつも持ち歩いていた大好きな絵本。自分だけの宝物だと思っていたけれど、じつは世界の子どもたちと共有していたのかも？

新しい言語展示場には、おなじみ『はらぺこあおむし』と『星の王子さま』がいろいろな言語で集合しました。前者は 50 言語、後者は 200 に近い言語で出版されています。ここでは、世界各国から集まった本を手にとって見ることができるだけではありません。なんと、ネイティブスピーカーによる朗読を聞くこともできるのです。

録音に協力してくださった方は、学生さんから年配の方までさまざま。「息子に毎晩せがまれて覚えてしまったから本はいらないよ！」といって暗唱してくださった若いお父さん。「孫が小さかったころを想い出すよ」と、目を細めながらゆっくり読んでくださったおばあちゃん。そして、身振り手振りをつけての力の入った朗読もありました。録音風景をご披露できないのが残念です。読んでおられる方の様子をあれこれ想像しながら聞いてみるもよし。知らないことばの響きに無心に浸ってみるもよし。はたまたいろいろな言語をとりかえひきかえ比べてみるのもよし。お好きな楽しみ方でどうぞ。

絵本のコーナーにはまた、普段あまり目にすることのできない点字版も 10 言語でお目見えしました。絵の部分が手触りの異なるいろいろな布地を組み合わせて表現されており、目で読む人も触って読む人も一緒に楽しめるすぐれもの。点字が実際にさまざまな言語を読むために使われていることを実感することもできます。

おなじみのお話を語っているはずの、世界各国から届いた見慣れない文字、聞きなれないことばの響き。小さいけれど大きな世界につながっている、そんな絵本のコーナーです。

世界の文字

八杉（やすぎ） 佳穂（よしほ）
民博 民族文化研究部

世界の文字をパネルで示す

世界の言語の数は四〇〇〇とも七〇〇〇ともいわれる。このあまりにかけ離れた数の違いは、言語とは何かの定義の違いによっている。文字も同じように、定義の仕方で、数が異なるが、それでも有史以来三〇〇〇に満たない。それらも、もとをたどれば、楔形文字（くさびがた）文字、エジプト文字、漢字、中米の文字といったほんのひと握りの文字に行き着く。文字を発明することがいかに難しい事業かがわかろうというものである。

新しくなった言語展示場の「世界の文字」は、人間の知恵と工夫の結晶ともいえる五〇〇〇年の文字の歴史を、無謀にも一枚のパネルであらわそうとしたものである。世界地図に、まず、いま世界で使われている文字を、漢字圏、インド系文字圏、ラテン文字圏、アラビア文字圏、キリル文字圏、その他に色分けして示した。そしてその上に、有史以来使われてきた文字を、文字見本とともに可能な限りあげている。すでに使われなくなった文字は灰色にして、読み順を矢印でしるしている。

多様な読み順

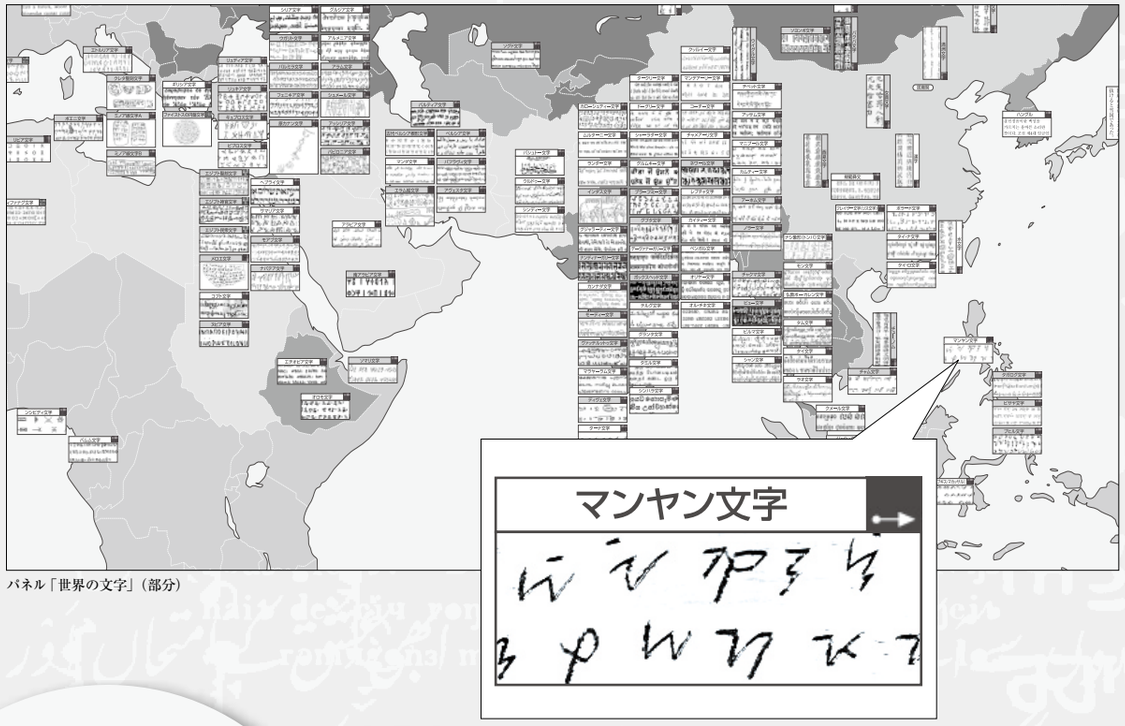
人間はさまざまな形の文字を生みだしたが、読み順も多様で、横書きの場合も縦書きの場合も、左から右、右から左のどちらもあり、左から右、右から左、左から右のように、牛が畑を耕すような牛耕式も長い歴史のあいだにはあった。さらには、オガム文字やリビア文字のように、下から上に書かれる場合や、二行を対に左右、左右と上から下へ読んでいくマヤ文字のような文字もあった。だいたい書き順と読み順は同じだが、マンヤン文字のように、竹のいっぽうを腹に当て、手前から向こうに文字を彫り刻んでいくが、読み順はふつう左から右といった変わり種もある。文字もそうだが、読み順においても、人間は、じつにあらゆる可能性を追求してきたようである。

表語文字と表音文字

文字というのは、言語の本来の姿である音声による伝達を目に見える形にしたものであり、大きく分けると、意味をもつ表語文字と音しかあらわさない表音文字がある。表語文字の代表は漢字である。表音文字には仮名のような音節文字とアルファベットのような単音文字がある。インドから東南アジアにかけて使われているインド系の文字は、本来母音aをもつ基本文字に、他の母音をあらわす文字や記号をつけて文字にしている。

我々の用いる漢字仮名交じりは、表語文字と表音文字の混合体系である。同じような文字体系に、楔形文字やマヤ文字があったが、同じ文字を使い分けていた。漢字と仮名というまったく異なる体系を混用する文字体系は珍しく、人類の生みだした貴重なる財産といえるものであるが、よくアルファベットは二六文字ですべてをあらわせて簡単なのに、漢字は数限りなく、覚えるのがたいへんだといって、すぐれた価値を見失っている人がいる。しかし、「山」や「川」を覚えるのと同じように、mountainやriverといった綴りを覚えなければならず、漢字を覚えるのとそんなにかわりがない。文字の本質は、意味ある単位をどのようにあらわすかということであり、それはアルファベットを用いるにしても、漢字と同じように難しいことなのである。

インド系デーヴァナーガリー文字。キは i が k(a) の文字の前にある



パネル「世界の文字」（部分）

方言のたのしみ方

井上（いのうえ） 史雄（ふみお）
明海大学教授

博物館は文字どおりモノを展示するところと思われているので、ことばは、文字にしるされない限り、展示されない。だから言語の博物館は、世界にそう多くない。ただし見方を変えて、音声としてのことばを紹介するなら、画期的な展示ができる。言語は時間軸に沿って伝えられるので、さまざまな言語や方言の音を聞かせる装置を置けば小さいスペースで多くの情報を提供できる。

民博創設当初から言語コーナーは人気があった。世界の言語の語順を回転板で示す装置や、日本の昔話がスイッチひとつで聞ける装置は画期的だった。自由にさわれる展示も魅力だった。人気がありすぎて、装置がこわれることもあった。

今回のリニューアルでは、技術の進歩が反映された。日本各地の方言による昔話が聞けるが、以前より反応がずっと早くなった。またストーリーに応じた絵が画面に出る。諸方言の仲間に日本各地の若者ことばを入れたのも面白い。今収録しないと、何十年かあとには変わってしまうという点では、高年層の伝統的方言と同じだ。高年層の貴重な方言録音と対比して、どの程度わかるか、理解度をくらべるのも楽しい。一カ所で日本各地の方言が聞ける場所は、今のところ民博以外他にない。

民博のことば、ことに方言への配慮は、初代館長梅棹忠夫の発想にもよるが、さかのぼれば柳田国男の民俗学の伝統とも、解釈できる。民博の言語展示は、場所は狭いが、さまざまな装置やアイデアを凝らした言語解説があって、独立したとしても、世界に誇りうる言語博物館になれる。

研究フォーラム

モノと人の関係を問い直す

竹沢 尚一郎（たけざわ しょういちろう）
民博 先端人類科学研究部

文化をめぐる問いひとつひとつにこたえるには、学問の垣根を越え、世界中の知を結集する必要があります。民博の研究者は、いったいどういう人たちと、どういう課題に取り組み、社会と学問の発展にどのように貢献しようとしているのでしょうか。「研究フォーラム」では、機関研究や共同研究といった大小のプロジェクトやシンポジウムなどが、どんな目新しさをもっているのか、発想の興奮を損なわずに、お伝えしていくつもりです。

われわれはモノとのかかわりによって生き、われわれの身体も、モノそのものです。今回は、人とモノのかかわりをもう一度、人類史的視野から問い直してみようという壮大なプロジェクトからの発信です。

人間とは道具を使う動物である。そのような定義がしばしばなされるほど、モノと人間のあいだには深い関係がある。火打石を用いて火を起こし、土器を作って煮炊きして、植物の硬い種子を柔らかくして食べるようになったことが、人間の大脳皮質の成長を可能にしたとされている。それほど、人間のあり方はモノによって変化してきたのだ。

とすれば、大量消費社会といわれ、機械やロボットが無数のモノを生産するようになった現代、わたしたち人間とモノとの関係は変わったのか。ユニクロに代表される、大量生産される安価な商品が世界のマーケットを席巻（せっけん）している一方、アート作品に常軌を逸した価格がつけられ、ブランドのバッグや時計に数カ月分の給料を支払う消費者の行動は、どう理解したらよいのか。さらに、モノの収集と展示のための施設としての博物館が世界中で増殖している現象は、なにを示しているのか。タトゥーや整形医療、臓器移植等による身体の加工が一般化した今日、わたしたちの身体もまた操作可能なモノと見なされるようになっているのか。

使い捨てと思い入れ

ふりかえると、わたしたちの行動は二極化しているように見える。わたしたちは一方で、モノを消費し、思い通りに加工し、使い捨てながら暮らしている。しかし他方で、一部のモノに対しては「崇拝」ということばが適切なほど、深い思い入れと価値を与えている。アート作品やブランド品だけではない。たとえば、結婚指輪や家族の写真、日々使うお茶碗（ちゃわん）、愛着ある衣服。これらがなくなったり、壊れたりしたら、あなたはどれだけ落胆するだろう。このことを見ても、わたしたちの生活と記憶がモノによって支えられ、維持されているのは明らかだ。

国際セミナー（民博にて 2009.12.8）

場所と意味

考えてみよう。わたしたちが今日、博物館や美術館で目にする古い絵画や彫像の多くは、もともとは寺院や教会に置かれ、儀礼のために用いられていたものだった。薄暗がりのおごそかな雰囲気に包まれ、祈りのことばがあたりを満たすなかで目にするそれらは、神聖な感情を引き起こすものであった。それらはわたしたちを世界に結びつけ、神や仏などの存在を実感させていたのである。しかし今日、博物館や美術館の白い壁の上に置かれ、白々とした光の下で照らされるそれらは、一切の神聖さを失い、単なるモノと化している。とすると、モノに対する人間の関係を変えたのは、十九世紀以降世界中に広がった博物館・美術館という制度でもあることになる。かくしてモノと人間の関係について問うことは、近代の制度としての博物館・美術館のあり方を問うことになるはずだ。

記憶媒体として

あるいは、モノと人間の記憶の関係である。結婚指輪や家族写真をはじめとするさまざまなモノは、人間の記憶を支え、かたちづくる媒体である。このとき、津波や地震のような大災害によって失われた人びとの生活や記憶は、なにによって再現できるのか。大量殺人によって破壊され、生活の根拠を根扱（こ）ぎにされた人びとの生活は、どのようにして語ることができるのか。「アウシュビッツ以降、詩を作ることは野蛮である」といったのは、ドイツの社会学者アドルノである。しかし、人間が経験したさまざまな出来事について語ることや、語ろうとする人びとを支援することは、歴史学や人類学を含めた人文科学の使命なのではないか。

1954年、宝塚の遊園地で展示されていたテレビジョン。価格は18万円、現在の価値で400万円を超える（提供・久保正敏）

唯一性とは

さらに、モノとしての身体の固有性にかかわる問いがある。モノとはその定義からして代替可能なものであり、その対極に位置するのは、唯一無二としての「わたし」であろう。しかし、タトゥーや整形、臓器移植等による身体の加工が日常化した今日、「わたし」の観念は以前のままなのか。もし身体が代替可能なモノに過ぎないとすれば、それに結びつけて考えられてきた「わたし」や精神もまた固有性を失い、代替可能なモノでしかなくなっているのか。

モノから見た世界

本研究は、これから三年の時間をかけておこなわれることになっている。わたしたち研究者は博物館という特殊な施設で働いているが、個々の展示の内容を改善することには努力してきたが、博物館とはなにかと問うことは少なかった。また、博物館とはモノの収集と展示に特化した施設であるのだが、人間にとってモノとはなにか、モノは人間にいかなる力を与えているのか、とあらためて問うこともほとんどなかった。

モノは単に受け身の存在ではない。モノはわたしたちを動かし、魅了し、わたしたちの生をかくあらしめている存在である。モノを操作可能な対象とみなすのをやめて、いったんモノの側から見たなら、世界とわたしたちはどのように違って見えてくるのか。本研究がめざすのは、そのような問いからはじめて、モノと人間の関係をみなおすことである。

民博機関研究
マテリアリティの人間学
「モノの崇拝：所有・収集・表象研究の新展開」
2009年4月～2013年3月
代表者：竹沢 尚一郎
＊関連シンポジウム＊
機関研究国際シンポジウム「エル・アナツイの世界」
実施日 2010年10月30日、31日
場所　国立民族学博物館
スーザン・ヴォーゲルのフィルムを上映

みんぱく Information

企画展

「歴史と文化を救う――阪神淡路大震災からはじまった被災文化財の支援」
阪神淡路大震災から15年を迎えた今、これまで展開されてきた被災文化財の救出活動を検証し、今後の展望を考える機会にしたいと考えます。
会期　7月22日（木）～9月28日（火）
会場　本館展示場内

「伝統の布の〝いま〟――東南アジアのふだん着にみる実情――」
東南アジアの国々で収集した「四角い布」や「筒型の布」などのふだん着を展示し、グローバル化が進展するなかで変貌をとげつつある伝統の布の実情を紹介します。
会期　7月22日（木）～9月14日（火）
会場　本館展示場内

音の力――夏のみんぱくフォーラム2010

◆研究公演
「侵蝕するガムラン」
実施日　7月11日（日）
時間　13時30分～16時（開場13時15分）
会場　特別展示館1階
※参加無料、申込不要

◆研究公演
「インド 歓喜の調べ――ラージャスターンの民俗音楽」
実施日　8月1日（日）
時間　13時30分～16時（開場13時）
会場　講堂
定員　450名
※参加無料、要申込
申し込み締切り　7月15日（木）必着

◆研究公演
「スロライと太平簫（テビョンソ）――カンボジアと韓国のチャルメラ音楽」
実施日　8月14日（土）
時間　13時30分～16時（開場13時）
会場　講堂
定員　450名
※参加無料、要申込
申し込み締切り　7月29日（木）必着

◆研究公演
「揺さぶる力――大阪浪速の太鼓打ち」
実施日　8月28日（土）
時間　座談会　13時30分～14時（開場13時）
　　太鼓演奏　14時15分～16時
会場　講堂
定員　450名
※参加無料、要申込
申し込み締切り　8月12日（木）必着

研究公演の参加申し込み方法
往復はがきに住所・氏名（返信用おもてにも）・年齢・電話番号・参加人数（本人を含め4人まで）、「国立民族学博物館友の会」会員番号（会員のみ。維持会員および正会員の方は優遇枠があります）と研究公演タイトル・実施日を書いて広報企画室企画連携係までお申し込みください。応募者多数の場合は抽選となります。

●みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ
「わが故郷の歌」
実施日　7月24日（土）
時間　13時30分～16時（開場13時）
会場　講堂
定員　450名
※当日10時より会場入口にて整理券配付
※参加無料、申込不要
以上、研究公演・映画会のお問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話　06・6878・8210
（平日9時～17時）

国際シンポジウム
「The City in South Asia」
日時　7月18日（日）10時30分～17時30分
　　7月19日（月）10時30分～18時
　　7月20日（火）10時30分～15時
会場　第4セミナー室
※参加無料、申込不要
※シンポジウムは英語でおこないます。通訳はありません。
お問い合わせ
研究協力課共同利用係
電話　06・6878・8361
（平日9時～17時）

博学連携教員研修 ワークショップ2010 in みんぱく
「学校と博物館でつくる国際理解教育――新しい民博展示を活用する――」
国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。
実施日　8月5日（木）
時間　10時20分～17時（受付10時より）
会場　セミナー室及び本館展示場
〈第一部〉講演とミュージアムツアー
〈第二部〉ワークショップ
①民博のデジタル・コンテンツを利用した授業づくり ②仮面をつくって語って異文化理解 ③「思いを込めた音」って何だろう? ④ことばの不思議・魅力 ⑤裏側見せます――「じゅうたんをつくろう!」を通して ⑥コーヒーモノガタリ――みんぱく篇 ⑦アフリカ・アカン族「砂金秤の分銅」づくり
※参加無料（定員に余裕があるワークショップは、当日参加も可能です）

参加申し込み方法
所属・参加者名・参加希望ワークショップを明記のうえ、左記までお申し込みください。
情報企画課展示グループ
FAX　06・6878・7523
e-mail:hakugaku@idc.minpaku.ac.jp

夏休みイベント
「氷の国のくらし 樹の国のおまつり～カナダ先住民のくらしと文化を体験～」
イグルー（雪の家）の模型の組立体験や、イヌイットのけん玉、ワタリガラスのお面を作ります。お面をかぶってポトラッチ（カナダ先住民のパーティ）に参加しましょう。
実施日　8月1日（日）「氷の国のくらし」
　　8月8日（日）「樹の国のおまつり」
時間　10時30分～15時
会場　本館展示場ナビひろば、第3セミナー室、他
※参加無料（一部参加費・本館展示観覧料が必要なイベントもあります）
参加申し込み・お問い合わせ
財団法人千里文化財団
電話　06・6877・8893
（平日9時～17時）

※詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■出口顕・三尾稔　編
『人類学的比較再考』
国立民族学博物館調査報告NO.90

■山路勝彦　責任編集
『民博通信』2010 NO.128
特集　植民地時代の日本人類学

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料
※本館展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第386回　7月17日（土）
【新音楽展示関連】
聖人の力を伝えるガムラン
講師　福岡正太（文化資源研究センター准教授）
インドネシア、ジャワ島北海岸の町チルボンにあるカノマン王宮には、聖人の力を伝える楽器ゴン・スカティが所蔵されています。この楽器は、年に1回、イスラームの預言者ムハンマドの生誕祭に演奏されます。ゴングと鉄琴を中心に構成されるこのアンサンブルがもつと考えられている不思議な力について紹介します。

第387回　8月21日（土）
【新音楽展示関連】
主張する太鼓
講師　寺田吉孝（民族文化研究部教授）
1960年代以降、社会的正義を要求する運動の一部として太鼓を演奏する例が増えてきました。日本（大阪）の被差別部落、アジア系アメリカ人、インドのダリット（不可触民）などを例として、このような運動における太鼓演奏の意味・位置づけについて報告します。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場◇国立民族学博物館 第5セミナー室
定員◇96名（当日先着順、会員証提示）

第386回　8月7日（土）
時間●14時～15時30分
企画展「歴史と文化を救う」関連
被災した文化財が語りかける歴史と文化の記憶
講師　日高真吾（文化資源研究センター准教授）
文化財の保存・修復活動とは、単に「壊れたものを直す」ということにとどまりません。活動を通して「過去の人びとの生活の記憶が刻まれた歴史の証拠品」から新しい発見に出会うこともあります。いかにこの財産を次世代に継承することができるか、被災文化財の保存・修復活動の視点から解説します。
※講演会終了後、企画展見学会があります。

第387回　9月5日（日）
※今回は日曜の開催ですのでご注意ください
時間●14時～15時30分
19世紀アメリカのユートピア思想
講師　鈴木七美（先端人類科学研究部教授）
「若草物語」は作者のオルコット自身の少女時代をもとにした半自伝的な小説です。彼女の家族はエマソンやソローといった超越主義者とも交流があり、当時としてもユニークな家庭、教育環境で育ちました。その背景にある19世紀アメリカで展開したユートピア思想その理想的な生活についてお話しします。

東京講演会
第94回　7月19日（月・祝）
時間●14時～15時15分
会場●国文学研究資料館　大会議室
定員●200名（要申込）
参加費●500円（友の会会員は無料）
人間文化研究機構 連携展示「チベット ポン教の神がみ」関連
チベット　ポン教とは何か
講師　長野泰彦（民族文化研究部教授）
ポン教は、仏教伝来以前からチベット文化域に広く分布している宗教で、チベット精神文化の基層を形成しています。ポン教の歴史や仏教との関連、現代におけるポン教の実態とポン教研究の意義についてお話しします。
※講演終了後、懇談会と展示解説があります。（友の会会員限定）

アクセサリーの映える季節です。

国立民族学博物館
ミュージアム
ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/
e-mail shop@senri-f.or.jp

陽射しが徐々に夏色を帯びてきました。アクセサリーの映えるこの季節、個性豊かなネックレスを数多くそろえました。
インドネシアのトンボ玉「ペランギ」や、ケニア・マサイ族の深い赤が印象的な「ソーラ・ビーズ」を用いたネックレス、そしてエチオピアン・クロスともいわれる「コプト・クロス」のペンダント・トップ。その土地で愛された彩りは繊細で思いのほかシック、柔らかな色調に魅了されます。すべて1点ものです。特別な一品に出会いに、ぜひミュージアム・ショップへお立ち寄りください。

トンボ玉ネックレス各種　8,925円～
コプト・クロス　15,750円

陳氏一族の栄華と革命の歴史を刻む

広東民間工芸博物館（陳家祠・陳氏書院）

川口 幸大（かわぐち ゆきひろ） 東北大学准教授

陳氏書院の外観

広州にある広東民間工芸博物館は、じつにユニークな博物館だ。まず、名前からして、「広東民間工芸博物館」とよばれることはめったになく、みなたいてい「陳家祠」あるいは「陳氏書院」とよぶ。「祠」とは祖先を祀る施設のこと、「書院」とは子弟への教育をおこなう民間の施設のこと。では陳氏の祖先祭祀かつ子弟教育のための建物がいかにして民間工芸博物館になったのか。それを知るには、一九世紀終わりの清代末期にまでさかのぼり、この建物の歴史をひもとかねばならない。

陳氏一族の書院から工芸博物館へ

一八八〇年、広東省各地の陳姓の人びとがお金を出し合って、書院を建てた。陳氏の書院、すなわち「陳氏書院」である。書院を利用できるのは建設の際に出資した一族の者たちだけであり、そこに出入りできること、祖先の位牌を安置できることは、たいへんな名誉であった。当時、陳氏に限らず広東各地の一族はこぞってこうした施設を建て、広州市内においてその数は三〇あまりにのぼっていた。

ときは流れ、一九四九年に新中国を建国した共産党は、このような一族の紐帯意識や祖先崇拝などを「封建迷信」として激しく排撃した。とりわけ文化大革命期には、陳氏書院は印刷工場として使用されただけでなく、壁や柱に施されていた美しい彫刻ははぎ取られ、五〇〇〇あまりあった祖先の位牌もほぼすべて燃やされてしまった。

その後一九七〇年代の末に共産党政府が階級闘争を収束させ、「改革開放」路線へと国策を転換すると、まもなくして陳氏書院の修築が始められて、一九八三年には一般に公開されるようになった。

一族の栄華と現代中国の歴史に思いをはせる

こんにち陳氏書院のなかには、刺繍や象牙彫刻など広東の芸術・工芸品が展示されており、「工芸博物館」の面目躍如といったところだ。しかしなんといっても見どころは、かつて陳氏一族のステイタスシンボルであった書院の重厚で静謐なたたずまい、修復された柱や壁の精巧な彫刻、そして建物の一番奥の祭壇に置かれたふたつの位牌であろう。五〇〇〇あまりの位牌のうち、わずかにこのふたつだけは、職員が秘密裏に保管して文革の難を逃れたのである。祭壇の前に立ってこの位牌を眺めていると、清代末期の陳氏の栄華と、共産党による革命の騒擾たる歴史に思いをはせずにはおられない。

壁に施された精巧な彫刻

祭壇に置かれたふたつの位牌

みんぱく 私の逸品

ハワイの女性神像（アウマクア）

標本番号 H0162514
地域 アメリカ合衆国 ハワイ諸島
収集年 1988年

民博 館長 須藤健一（すどうけんいち）

カメハメハ王朝時代まで、川の流れる谷筋がハワイ先住民の居住空間であった。上流にはタロイモ田が広がり、中流に平民の家々が、下流の平地には祭壇と首長の荘宅がたてられていた。そして海岸にはボラの養殖池があった。戦争の神（クー）、生命の神（カネ）、農耕の神（ロノ）、海の神（カナロア）など神格の高い神がみは祭壇から人びとの生活を見守っていた。首長は毎年ロノ神を招いて司祭に供物をささげさせ、豊穣（ほうじょう）に感謝する儀礼をとりおこなった。恐ろしい火山の神、ペレには詠唱と性的なフラの踊りを奉納し、神の怒りをなだめた。

家では家族や個人が神をまつった。アウマクアとよばれる女性神像は祖先の精霊。この祖先像は、鋭い輪郭、真珠母貝の目、毛髪をつけた頭など頑健なハワイ人の身体をあらわし、力強く好戦的な表情をみせている。男性に負けない女性の「指導力」を象徴しているという。この神は、家族の平安と健康を守ると同時に、邪悪な悪霊を退治してくれると信じられていた。さらに妖術によって誰かに危害をくわえる力もあるという。

ハワイ王国は一九世紀初頭にキリスト教を受容し、カプ（タブー）やハワイの伝統宗教を信ずることを禁止した。そのために、ハワイの人びとは豊かで平和な社会で暮らすために頼ってきた、生きた精霊や神がみとの関係を放棄してしまった。

この神像はホノルルのビショップ博物館所蔵のアウマクアをハワイ人芸術家が彫りあげた「ほんもの」である。

散策と思索の径

ドイツ・バイエルン州の森を歩く

佐々木 史郎
民博 民族社会研究部

ドイツ南部に広がるバイエルン州は南にアルプスを控え、山と森と湖に恵まれた風光明媚な観光地が多い。また、かつてはバイエルン王国という独立国であり、ノイシュヴァンシュタイン城をはじめ王国ゆかりの歴史遺産も多数ある。バイエルンの美しい森は州の観光資源であるとともに、木材生産の場でもあり、野生動物の宝庫でもある。今ドイツの森でも、木々の育成と野生動物の保護、そして観光振興の三者をいかに共存させるかが問題となっている

狩猟官の仕事

わたしがドイツの森林問題に接する機会をえたのは、二〇〇八年一一月である。ミュンヘン工科大学の狩猟と森林管理を専門とするマルクス・シャーラー博士と、彼の友人で狩猟官のマックス・ケラー氏と知己をえたからである。狩猟官とは日本では聞き慣れない職業だが、特別な訓練をへて資格をえたプロの猟師で、森のなかの野生動物の管理や有害鳥獣の駆除、密猟の取り締まり、アマチュア猟師のガイド等の活動をおこなう。バイエルン州には州有林が多く、森の資源は州の貴重な収入源でもある。野生の鳥獣も当然活用すべき森林資源であり、狩猟は森での生産活動の重要な部門であることから、それを管轄する専門の官職を設けているのである。

集団追い込み猟

ケラー氏がまず案内してくれたのは、彼が所属するオーバーアマガウの営林署が主催する秋の有害獣狩猟だった。場所は観光地で有名なガルミッシュ=パルテンキルヘン近郊で、狩猟対象はノロジカのメスとアカシカである。ノロジカの場合は繁殖を抑え、食害を予防することが目的なのでこの時期の狩猟対象はメスである。この狩猟は集団追い込み猟だった。まず、複数の猟師が猟場となる山の斜面に配置される。猟師たちは配置された場所から動けないが、その代わりに彼らが連れてきた猟犬が藪のなかを走り回って獲物を探し出し、猟師がいるところまで追い立ててくれる。猟師は追い立てられた獲物が目の前にあらわれたところを撃つ。この日の猟では一九人の猟師が参加して、午前九時から一一時まで二時間活動して、ノロジカ一頭とアカシカ一頭というのが成果だった。

人工の塩場

狩の翌日、ケラー氏は彼が管理する森を案内してくれた。ドイツ最高峰のツークシュピッツの麓に広がる美しい森である。彼がまず見せてくれたのは、所々の空き地にある人工の塩場だった。空き地のなかに塩の塊が置かれていて、一〇〇メートルほど離れたところに櫓が組まれている。そこから塩場にきたシカを観察するのである。猟期にはそこから動物をねらうこともできる。わたしはロシア極東で先住民族が作った塩場とその近くの樹上に設置された待ち伏せ用の台を見たことがある。このような狩猟方法はロシア人がヨーロッパからもち込んだものといわれていたが、ドイツでその本当の姿を見たような気がした。

冬の禁猟区

さらにアカシカの冬期のえさ場を案内された。今バイエルンの森でもシカ類による木の食害が深刻である。冬のえさが少ない時期に多くのシカが樹皮や新芽をかじって木を枯らしてしまうのである。それを防ぐために、ケラー氏は森の一部を柵で仕切り、晩秋にシカをそのなかに追い込んで、翌春までそのなかでクリやドングリ、リンゴの絞りかすを与えて越冬させているのである。そのえさ場と周辺地域は禁猟区となる。彼によれば、冬の食害を防ぎ、シカもえさに困らないという一石二鳥の方策ということだったが、当然批判もある。森林業者からは害獣をせっかく集めるのだから一網打尽にして駆除すべきだという声があり、動物保護団体や狩猟団体からは、どうせ夏に森に放って狩猟対象とするのだから、えさをやって越冬させるのは偽善だという声もある。

密猟の取り締まり

そのほか森林伐採と植林の現場も案内してもらった。また、ケラー氏が自分の森でもっとも気に入っている場所として、ツークシュピッツを仰ぎ見ることができる美しい湖も見せてくれた。彼自身この森を非常に気に入っていて、一日の大半を森のなかで過ごしている。それだけに自分の家の庭のように、森のなかを知り尽くしている。しかし、狩猟官の仕事には危険も伴う。特に密猟の取り締まりは、相手も武器を所持していることから、命がけである。

野生動物資源と木材資源、そして観光資源の三者をいかにすべて共存させつつ持続的に利用するのか。美しい南ドイツの森で、狩猟官はこの問題に頭を悩ませつつも、今も懸命にパトロールを続けている。

捕獲したノロジカを検分するマルクス・シャーラー博士

塩の塊を置いてシカをおびき寄せる人工の塩場

ドイツの最高峰ツークシュピッツの麓に広がるマックス・ケラー氏が管理する森

ノロジカとアカシカの猟場

シカのえさ場
（フィーディング・ステーション）

多文化をささえる人びと

ある無料雑誌から垣間みる在日ブラジル人の動向

日本に住むブラジル人がもっとも頼りにするメディアは何だろうか。
在日ブラジル人の近況についてあまり詳しくない人なら、新聞やインターネットと答えるだろう。
しかし、彼ら彼女らとの付き合いが深い事情通ならば、「フリーペーパー」と答えるに違いない

アンジェロ・イシ
武蔵大学准教授

一九九〇年代を通して、ブラジル系のエスニック・メディアは有料の週刊新聞や衛星放送のテレビ・チャンネルが主流であったが、とりわけ二〇〇〇年代に入ってからは、何十誌もの無料雑誌が創刊され、業界の勢力地図を一気に塗り替えた。そして、常にこの市場をリードしてきたのが、『アウテルナティーヴァ』（Alternativa）という隔週雑誌である。

『アウテルナティーヴァ』は、神奈川県愛川町（あいかわまち）に移住した二人の日系ブラジル人によって創刊された。当初はジャーナリスティックな記事はほとんどなく、「求人広告」（Classificados）が最大の売りだった。これがブラジル人のニーズに見合っていた。それまでは、多くのブラジル人は有料新聞を買い、記事よりも先に、めぼしい転職先がないかと求人広告に目を通していた。インターネットの普及により、ニュースなら簡単にパソコンで閲覧できるようになったが、求人募集の情報だけは、ネット空間での収集が困難であった。『アウテルナティーヴァ』の登場で、求人情報が無料で入手できるようになったのだ。

総合誌として発展

同誌は二〇〇四年に大きな転換期を迎えることになる。多くのジャーナリストが雇われ、本格的な総合誌として生まれ変わったのだ。硬派な特集記事、辛口の連載コラム、ユーモラスな風刺画など、徹底的にコンテンツを充実させ、読者数、ページ数、そして何より広告覧の質量を向上させようという戦略であった。これが的中し、発行部数はみるみる膨れ上がった。二〇一〇年現在、強力な競合誌との市場争いもあり、隔週で六万部を発行するという、エスニック・メディアの世界では驚くべき数字を維持している。

さらに驚くのは、この六万部という数字が「公称」ではなく、ＡＢＣ協会に証明されていることだ。ＡＢＣ協会といえば、日本の代表的な日刊紙や優良誌が加盟している、部数の監査機構である。数多いブラジル系の媒体のなかで、最初にこの協会に加盟したのが他でもない『アウテルナティーヴァ』であった。その狙（ねら）いは、ヒカルド・タイ社長によれば、大量の雑誌が確実に市場に出回っていることを証明することにより、広告主に対する信頼感を高めることだった。

コミュニティの鏡

メディアは社会の鏡であるというが、ブラジル系のフリーペーパーを通して、コミュニティの動向や課題、そして読者の悩みや願望が垣間（かいま）みられる。

『アウテルナティーヴァ』の表紙や中身を見渡せば、景気が良かったころには、アジアのリゾート地の特集が表紙を飾ることは珍しくなかったことに気づく。また、マイホームを購入する人が増えてくると、日本で自宅を購入したため、ブラジルにいる大嫌いな姑（しゅうとめ）と同居せずにすむとはしゃいでいた男が、妻に「ママを呼び寄せたの」と告げられて、「マイホームの夢が姑との同居という悪夢に変わってしまった」という風刺画が掲載された。

同誌が一貫して力を入れてきたのが日本語学習への意欲の促進である。二二四号の表紙を飾った「努力は報われる～日本語を学習したブラジル人たちが何が変わったかを語る」という特集は、この編集方針を象徴している。他方、まったく日本語がわからなかった記者による日本語学習体験記「日本語を学ぶ」（Aprendendo Japonês）は人気を集めている。

しかし、もっとも印象的な表紙をひとつ選ぶならば、迷わず二〇〇八年六月一九日発行の一八一号だ。この日付を見てピンと来る人もいるだろうが、二〇〇八年六月一八日はちょうど日本からブラジルへの移民百周年記念日だった。その翌日を発行日とした「百周年特集号」では、「表紙を飾れ」という企画が組まれ、反響を呼んだ。愛知県名古屋市で毎年開かれるブラジル系企業の見本市、「エキスポ・ビジネス」で出展した同誌のブースを訪れた二〇〇〇人の読者全員が特設スタジオで写真撮影をし、自分の写真で一点ものの表紙を無料で作成してもらえるという大胆な企画だった。そして一八一号では、選ばれた一〇〇人の表紙がプロフィールとともに掲載された。

経済危機の影響

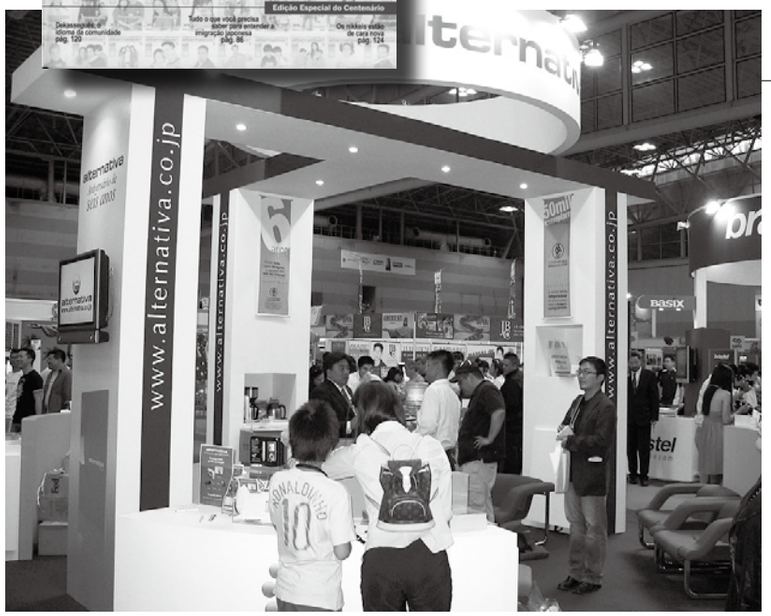
二〇〇八年下半期のリーマン・ショック以降の雇用危機と派遣切りで、多くのブラジル人が職を失い、六万人以上が帰国した。一時期は三一万人を超えたブラジル国籍者数も、二〇一〇年現在、約二五万人に減少したと推計される。在日ブラジル人向けのビジネスやサービスは不況とデフレ・スパイラルに襲われ、多数のフリーペーパーが廃刊になった。にもかかわらず、『アウテルナティーヴァ』やその競合誌は部数を減らさずに踏ん張っている。これが各社の経営を圧迫しているともいわれるが、従来の部数を死守するという決断は各経営者のプライドやライバル意識とも無縁ではなかろう。じつは、どのメディア企業も多くの記者を解雇した。これによって、取材能力、編集能力が著しく弱体化した。コミュニティの世論形成や意識啓発において重要な役割を果たすメディアの質の維持が危ぶまれる、いや、望まれる。

移民百周年記念の画期的な企画

W杯の年にサッカー特集は欠かせない

日本語学習を促進する特集。
連載コラムも新設された

旬な話題を取り入れたユーモラスな漫画



名古屋市の見本市ではメディアも出展している

CALENDAR 七月 第28回

歳時世相篇

ビールの美味しいころ
神話としての「やってみなはれ」

キリンとサントリーの合併話が泡と消え、
一方でサントリーの「やってみなはれ」精神が強調された。
サントリーの「やってみなはれ」神話とは……

出口正之
民博 外来研究員

キリンとサントリー合併の破談

ビールが美味しい季節となった。ビールといえば、去年の暮れから今年の初めにかけて、キリンとサントリーの合併騒動さらに破談にいたった一連の動きが世情を賑わせた。今年の夏は、こうした話題に花を咲かせながらジョッキを傾ける御仁も多いと思う。合併すれば、国内のビール類のシェアでは約五割、年間売上高約三兆八〇〇〇億円に達し、世界有数の酒類・飲料メーカーが誕生するはずだっただけに、破談報道も新聞各紙の一面を飾った。

面白かったのは、新聞各紙が盛んに両社の文化の違いを指摘していたことだ。

たとえば、経済専門紙である日経産業新聞においてさえ、「『やってみなはれ』の伝統が染みついているオーナー経営者」とサントリーホールディングスの佐治信忠を評している。

神話の誕生

それでは「やってみなはれ」の企業風土とはいったい何だろうか？筆者はサントリーで働いた経験をもつ。「やってみなはれ」に直に接し続けた。経営人類学的にいえば、「やってみなはれ」というのは、神話である。創業者の鳥井信治郎とその息子で第二代社長の佐治敬三との会話から生じたことになっている。この神話は、サントリー七〇年社史によって完成した。完成させたのは芥川賞作家開高健と直木賞作家山口瞳。じつは、サントリーは昭和三〇年代に、宣伝部という小さな所帯から、開高と山口の二人の大作家を誕生させている。七〇年史はこの二人の作家が書いたもので、社史篇の第一巻が『やってみなはれ』、資料篇の第二巻が『みとくんなはれ』のタイトル。

『やってみなはれ』では「戦前篇」が山口著、「戦後篇」が開高著である。社史とはいっても、鳥井信治郎と佐治敬三の伝記に、宣伝部の逸話が混じったノンフィクションといったもので、芥川賞直木賞受賞者が執筆した異色の社史といえる。この社史こそ「やってみなはれ神話」を完成させた聖なる書であった。

神話の完成

大阪の商人で、道修町の丁稚だった鳥井信治郎が一八九九年にワインの製造販売を始めたのがサントリー

日本の夏の風物詩ビアガーデン（写真提供:千里阪急ホテル）

そもそもの始まりである。鳥井信治郎は赤玉ポートワインの成功でえた資金をもとに、ウィスキーの製造に挑戦した。ウィスキーが商品として企業の力になるまでは、歯磨き、紅茶、ジュースと多種多様なものの小口のヒットを繰り返していた。ところが、その時代、正確には昭和三（一九二八）年に、一度、ビールに手を出して失敗したという苦い経験をしている。「オラガビール」という。この「創業者の失敗」が「やってみなはれ神話」の大きな伏線となっている。

また、第二次世界大戦後、寶酒造（現：宝ホールディングス株式会社）が、ビールの製造販売を試みている。当時米国占領下の沖縄でのオリオンビールを除けば、国内のビール製造は、キリン、アサヒ、サッポロの三社だけだった。寶酒造は一九五七年四月一日、「タカラビール」を発売。一～二パーセントのシェアしか取れずに、苦戦を強いられていた。結局、一九六七年にビール事業から撤退することになった。当時、「タカラビール」の苦戦が周知の事実のなかで、ビールへの挑戦というのは、創業者の屈辱からほぼタブーになっており、文字通り社運を賭ける大決断だったのである。息子の佐治敬三が父鳥井信治郎の枕頭で、ビール製造の決意と意図を打明け、信治郎が「……やってみなはれ」と言ったことになっている。このときの創業者と二代目のやり取りを『やってみなはれ』のなかで開高は生き生きと描いた。ここに、「やってみなはれ神話」が誕生したのである。

サントリアンと神話

サントリーの職員は自らのことを「サントリアン」とよぶ。神話はこのサントリアンに強い凝集性と矜持を与えている。サントリーホール、伊右衛門、青いバラ、最近では角瓶のハイボール作戦など成功した事業の新展開が「やってみなはれ」の神話に基づいて事後的に語られている。新しい挑戦に対して自らに「やってみなはれ」と言って奮い立たせている。独自の文化集団が独自の神話を奉じているのである。

日経産業新聞の「破談で残った『やってみなはれ』」をはじめ、キリンとサントリーの破談に際しては、この企業神話が残ったことに対する好意的な受け止め方もある。キリンサイドの個性がほとんど語られないままに、サントリーの神話だけが一方的に語られたのである。

さて、今宵はビールの泡を飛ばしながら、神話について語るのもよいではありませんか？

フィールドで考える

考試村の公園には、考試生が休息と情報交換に集まる（2010年5月 撮影・李康元）

考試食堂のひとつ。営業時間に月極めでも食事ができる（2010年5月 撮影・李康元）

考試村にあふれる考試食堂、考試読書室、考試書店（2010年5月 撮影・李康元）

蘭谷のボランティア施設で勉強する子ども（2000年11月 撮影・趙文英）

蘭谷一帯はこの後に行政によりすべてとり壊された（2000年12月）

エリートは語ることができないか

太田心平
民博 研究戦略センター

ソウルを自分のフィールドに決めてから二年が過ぎ、市の南端の新林（シッリム）地域、さらにその南部に引っ越した二〇〇〇年の終わりごろ、わたしの調査は揺れていた。

新林南部は山で東西にわかれる。東側はソウル大学で、西側にはそのころまで蘭谷（ナンゴク）とよばれる貧民街があった。ソウル大には、蘭谷でボランティア活動に励む学生が珍しくなかったし、そうするうち蘭谷の人びとの声なき声を記述することに目覚める社会科学徒たちもいた。そんな学生たちを指して「蘭谷派」なる呼び方まで聞かれた。

当時のわたしは、工場労働者やホームレスの支援活動にかかわりながら、社会の底辺層の研究を始めようとしていた。蘭谷派の学友たちからも多くのことを学んでいた。ただ、自分はどうも蘭谷派にはなりきれない。真逆に近いことに気を取られはじめていたのである。

考試生の暮らし

わたしが新林で最初に住みついたのはソウル大と蘭谷の狭間（はざま）にある小さな地区、「考試村（コーシチョン）」。ここは国家試験の受験（考試（コーシ））対策のメッカとされ、有力な予備校が散在し、法曹人や高級官僚を志す若者たちが全国から集まっていた。わたしが住んだのは、マンションでもワンルームでもなく、「考試院（コーシウォン）」のひとつ。部屋は四畳半たらずの狭さで、シャワー室、トイレ、洗濯機は共用だし、炊事施設もない。ただ、机と椅子と本棚は備えつけで、保証金が不要、家賃も安い。築二年と新しく、小さいながら窓もあり、冷暖房がつねに利いていたが、それでも月極（ギ）め家賃が公共料金込みで二七万ウォン（約二万五〇〇〇円）だった。

ここに引っ越してすぐ、同じ建物の窓なしの部屋に住む二九歳の「考試生（コーシセン）」Wと知りあった。彼の一日はざっとこんなふうだ。まず六時ごろに起き、すぐ近所の「読書室（トクソシル）」に行く。ここには間仕切りつきの机が並ぶ大部屋があり、月に八万ウォンで机とロッカーを貸してくれる。そこで二時間ほど勉強すると朝食だ。五〇枚一八万ウォンほどで買った食券をもち、考試生用の食堂の列に並ぶ。このとき新聞を読み、食堂のテレビに見入るのが、彼にとって外界との唯一の接点だった。その後は、昼にまた同じ食堂に行くのを除き、夕方まで予備校だ。夕食は考試仲間とどこかで軽くとるのだが、遠出もせず一時間以内には読書室に戻る。彼が考試院に帰るのは0時前で、睡眠時間は五時間ほど。予備校に行かない日も、読書室にいるだけで大差がない。実家までは二時間ほどと近いのに、盆正月と試験直後の年三回しか帰省しない。彼はこんな生活を五年も続けていたが、それも考試村ではザラなことだった。

青春をなげうつわけ

どうしてWはこんな生活をしているのだろう。もちろん司法試験に受かり、法曹界に入るためだ。ただ、Wはその理由を「この国の正義のため」などという、ありがちな口上では語らない。「結局は人よりうまく生きたいからさ」。

Wは有名大学の法学部を卒業している。大学の友だちのなかには、一流企業に就職して、それなりにうまく生きている者も多い。「もう係長になっていたりしてね」。それを見ると、自分が惨めに思えることもあるという。でも、司法試験に受かったら会社員とは人生の格が違うのだという。

Wはよくわたしの研究の話を聞きたがった。底辺層の研究をすると話せば、韓国ではしばしば「いいことだ」と褒められたり、「それで韓国全体が語れるわけ?」と貶（けな）されたりするものだが、Wは違った。ただ、時どき「考試生もある意味で底辺なんだけどなあ」と苦笑いしていた。

エリートの帰還

それから四年が経（た）ったころ、弁護士になったWが訪ねてきた。会って近況を話すうち、彼は熱っぽく語りだした。おおよそこんなふうに。「弁護士も人間さ。蘭谷の人びとと同じくね。癒（い）えない傷も、特有の苦悩も、非合理な人間関係や、迷信的な精神世界もある。でも、それは贅沢（ぜいたく）話だっていわれて、大きな声じゃいえない。他の立場の人には理解も代弁もしてもらえない。きっと出来ないし、関心もない話さ」。

すでにわたしは底辺層の研究から身を引いていた。底辺層支援の同伴知識人の思考や、そのもとになる認識や社会関係などを調査し、フィールドを去ろうとしていた。サバルタン（虐（しいた）げられた人びと）を対象化する蘭谷派とは対照的に、エリートを対象化しようとしていた。あらためてこのとき、Wとの出会いがわたしの研究の転機だったのかと思った。わたしの見つけた方向は、弱者研究の流行にに待ったをかけた有名な専門書『サバルタンは語ることができるか』をもじっていわば、「エリートは語ることができないか」だったのだ。

7月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■本館展示観覧料が必要です。
■開催日により時間が異なります。ご注意ください。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

4日（日曜日）

時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：上羽陽子　（文化資源研究センター助教）
話題：インドの花嫁衣裳 ――その形態と役割を考える
場所：南アジア展示場

11日（日曜日）

時間：11 時から 12 時
話者：樫永真佐夫　（研究戦略センター准教授）
話題：タイのボクシング
場所：１Ｆエントランスホール

18日（日曜日）

お話
時間：13 時から 14 時
話者：鈴木裕之（国士舘大学教授、国立民族学博物館客員教授）
話題：無文字社会から生まれたアフリカ音楽の魅力
――西アフリカのマンデ音楽を中心に
場所：本館展示場内ナビひろば

公演
時間：14 時 15 分から 16 時
公演名：アフリカン・ポップスの響き――ニャマ・カンテとジェリドン
場所：１Ｆエントランスホール

25日（日曜日）

時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：吉本忍（民族文化研究部教授）
話題：伝統の布の“いま”
場所：企画展示場 B

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

山開き・海開きの7月、本誌もページを開いていただくとわかるように、誌面がリニューアルされた。年度途中だが、3月末にリニューアルオープンした言語展示、音楽展示の特集記事を順次掲載するのに合わせてこの時期となった。特集記事はページ数が増え、表紙も、今後はモノにこだわらず特集に応じた柔軟なデザインとなる予定だが、今号の表紙はいかがだろうか。

新コーナーも登場した。研究の生々しい最前線、研究を始める際の目のつけ所、などを紹介する「研究フォーラム」、フィールドを歩きながらより広い視点で考える「散策と思索の径」、研究者や民博を訪れる人びとの思い入れからモノを紹介する「みんぱく 私の逸品」など、民博のさまざまな活動を研究者の眼差（まなざ）しからより広く紹介するコーナー。研究活動がさまざまな博物館活動と不即不離であること、事業仕分けという動きのなかで、人文社会系の基礎的な研究は効率・速効の視点だけでは測りにくいことへの、読者諸賢からのご理解とご支援をお願いしたい。編集委員や制作体制の一部に異動があったことも付記しておく。（久保正敏）

表紙　新しくなった言語展示場に掲げられているパネル「世界の言語」より

次号の予告

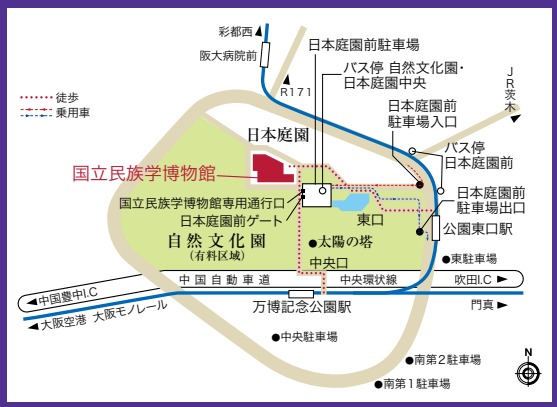
特集
音の力

月刊みんぱく　2010 年 7 月号
第 34 巻第 7 号通巻第 394 号　2010 年 7 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　朝倉敏夫　樫永真佐夫
庄司博史　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/